

パラドックスがもたらす悲劇

—*The Picture of Dorian Gray*のSibyl Vaneを中心に—

加藤 愛*・松村聡子**・板倉憲政***

KATO Megumi, MATSUMURA Satoko and ITAKURA Norimasa

はじめに

Oscar Wilde (1854-1900) によって書かれた *The Picture of Dorian Gray* (1891) は、三人の登場人物である Dorian Gray, Basil Hallward, Lord Henry Wotton と画家である Basil が描いた Dorian の肖像画を軸に話が展開し、主人公である Dorian の自殺という形で幕を閉じる物語である。本作は Wilde の精神が様々に反映されたものとして論じられてきた。例えば、佐々井啓はダンディズムの装いとして Dorian と Lord Henry の服装に Wilde の服飾観が反映されていることを指摘している (26-30)。また、Wilde 自身が同性愛者であったことから、Dorian の肖像画に表れる変容は Basil の Dorian を想う同性愛的欲望の帰結である (角田 215-216) という分析もある。一方で、本作は分身 (“double”) がテーマのひとつであることでも知られている。同テーマで書かれた同じ 19 世紀の作品として、Edgar Allan Poe (1809-1849) の “William Wilson” (1839) や、Robert Louis Stevenson (1850-1894) の *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* (1886) を挙げるができる。しかし、これらの作品との注目すべき差異は、登場人物間のコミュニケーションによる主人公の精神的变化の有無である。William Wilson や Dr. Jekyll は、物語の冒頭から非人道的な性質の描写があり、彼らの破滅の原因は彼ら自身の内面に求めることができる。これに対し、もともと純真無垢であった Dorian は、主に Lord Henry とのコミュニケーションを通じて様々に影響を受け、その精神が大きく変化していくのである。Dorian を巡っての、Lord Henry と Basil という男性三人の関係が作品内で大きな比重を占める中、女性として独自の存在感を放つのが、女優で彼の初恋の相手でもある Sibyl Vane である。彼女は Dorian と婚約していたのだが、突然に演技力を失ったことで、彼から婚約を破棄され、すぐに自殺してしまうのである。その直後に Dorian の肖像画に初めて変容が表れる。そしてそれが、彼の精神が揺らいでいきかけとなるため、彼女の死は本作の展開において重要な役割を担っていると言えよう。本論では Sibyl の存在に着目し、Dorian とのコミュニケーションから彼女の死について考察を深めていきたい。

1 コミュニケーションとは

本論で扱うコミュニケーションとは、臨床心理学分野で発展してきた語用論的側面をもつコミュニケーション理論に基づいたものとする。語用論的側面とは、コミュニケーションが行動に影響を与え、という行動的効果をもつ側面である。言い換えれば、コミュニケーションでやりとりされるメッセージは一義的ではないにせよ、相手の行動を拘束していると言える。また、語用論的観点からは、すべての行動がコミュニケーションであると同時に、すべてのコミュニケーションが行動に影響を与えている。つまり、行動の有無や反応の有無すべてがメッセージとなるため、コミュニケーションの参与者は発信者や受信者といった区分がされるのではなく、協働によってコミュニケーションを行っている

* 岐阜大学教育学研究科

** 岐阜大学教育学部英語教育講座

*** 岐阜大学教育学部学校教育講座

るのである。コミュニケーションが語用論的側面をもつことは、メッセージが受け手の持っている情報を変化させ、結果的にその人に影響を与えたり、その行動を変えたりすることに由来している。なお、ここでの語用論とは、語や文の使用法、使用者や文脈と関連した意味を扱うといった厳密な意味での言語学における一分野ではなく、臨床心理学研究の中で展開してきた、コミュニケーションの行動上への影響を扱う言語学である。

2 パラドックスとは

パラドックスの発見とその解決は哲学的思索にかかわるものであり、学問そのものの展開と発展に貢献してきた。最も単純なパラドックスは修辭的パラドックスというものである。これは一般的に良くないとされている対象を弁護するものであり、古典の典型例として、Isocratesによる醜男Tersites賛美や、Synesiusによる禿頭礼讃などがある。修辭的パラドックスといっても、これは論理上の問題を呈している。そもそも礼讃不能なものが礼讃可能であるのか。すなわち、礼讃可能なら礼賛不能ではないはずであり、礼賛不能であれば、パラドキシカルな散文の非常に多くの作品が存在しないことになる。これは自己矛盾を起こしており、一種の論理的パラドックスである。

論理的パラドックスの典型がRussellのパラドックスである。彼は数学の確たる基礎を求めてCantorの集合論にその礎を見込んだが、研究を進める中で集合のパラドックスを発見したのだった。彼は集合を二つに分類した。一つは自身の要素でない集合である。日常における具体的な物質の多くがこれにあたる。例えば、要素がオレンジである集合はオレンジではなく、要素が犬である集合も犬ではない。次に、自身が要素である集合である。これは抽象的なものに多く、概念や集合といったものが当てはまる。概念の集合それ自体が概念であり、集合の集合もそれ自体が集合ということである。Russellはあらゆる集合がこのいずれかに分類されると考えたのだが、そこで発見されたのがパラドックスである第三の集合である。それは、自身が要素でない集合の集合というものであった。この集合は、一つ目にも二つ目にも当てはまらない定義であるが、このような集合が必ず存在しているとRussellは考えた。そこで、そのパラドックスを解くために彼が持ち出した理論が階型理論 (“theory of types”) である。階型理論によって彼は、第三の集合が字句上で矛盾をきたし、無意味なものであることを発見したのだ。なぜなら第三の集合において、自身以外の要素と、その集合、さらにまたその集合というのは、それぞれが三つの階型に分類されるものであり、どれも等しい階型に属するものではないからである。つまり、そのような集合は存在しない、意味のないものなのである。

同様のパラドックスが意味論的パラドックスであり、典型例に嘘つきパラドックスがある。

クレタ人のエピメニデスが言った。「クレタ人は皆嘘つきである」と。

このパラドックスも自己言及的であるため、論理的パラドックスに含まれている。Russellはここでも階型理論¹によってそのパラドックスを解いている。

Russellの階型理論をコミュニケーションに用いたのがGregory Batesonである。Batesonは人間のみならず、動物間のコミュニケーションにおいても様々な階層によるメッセージのやりとりがあることを発見し、メッセージにも論理階型があるとした。コミュニケーション上の論理階型においては、言語によるメッセージよりも非言語によるメッセージが論理階型の一段高いメッセージである。このことから、コミュニケーション内で交換されるメッセージや、コミュニケーションそのものがパラドックスを孕みやすいということが言える。Batesonの研究から、Watzlawickらは臨床心理学領域にお

1 厳密には、狭い意味での論理的パラドックスに対しては分岐階型理論、意味論的パラドックスには単純階型理論が当てられている。なお、本稿で扱っているBatesonの論理階型理論は単純階型理論にもとづくものである。

いて独自の言語学を發展させ、『人間コミュニケーションの語用論』の中で人間のコミュニケーションに見られるパラドックスを語用論的パラドックスとしてまとめている。先に、コミュニケーションには語用論的側面があると述べたが、パラドックス的コミュニケーションは行動をさらに強く制限する効果がある。本論では、この語用論的パラドックス、その中でもパラドックス的命令という視点からSibylの死について論じていく。

これまで挙げてきたパラドックスは、どれも論理的パラドックスと深くかかわりあっているものがあるが、さらに広い意味でパラドックスとは、通説観念に反するものという意味がある。角田は、「彼のテキストがもつ個性とは、逆説というスタイルにはほかならないのである」(50)と述べているが、つまり、Wildeの個性とは、ありふれた概念にとらわれない独創的な発想にあると言えるだろう。

3 Sibylの受けたパラドックス

Sibylについての言及があるのは第4章からであるが、Sibyl自身が作品内に現れるのは第5章である。ここではSibylがDorianと婚約したことを母親に告げ、Dorianとの恋仲になったことを歓喜している様子が描かれている。しかし、弟であるJamesはSibylの身を案じており、Dorianとの関係によってSibylにもしものことがあれば必ず復讐するという決意を示している。第6章は、Lord HenryがBasilにDorianの婚約を伝える場面から始まっている。すぐにDorianも登場し、女優としてのSibylの才能について熱弁したのち、彼女の出演する劇を觀賞しに行くこととなる。そして、問題となる第7章である。舞台上にいる女優Sibylは、BasilもLord Henryも認めるような非常に美しい娘であったが、その日の芝居はひどいものであり、Dorianは面目をつぶされた気分になるのである。終演後、DorianはSibylのいる舞台裏に向かうが、本当の恋愛を知ってしまったがゆえに愛の芝居などできないと夢心地で訴える彼女に幻滅した彼は、婚約を破棄し、追い打ちを掛けるかのように苦言を吐いてその場を去る。家に戻ってふと肖像画を見たDorianは、肖像画の口元が残酷なものを帯びていることに気づく。それによって、自分がSibylに対して冷酷であったために、肖像画がその精神を反映したのだと悟る。Sibylに対する自らの態度を反省したDorianは、彼女に謝って再び婚約し、幸せな結婚をすることを決心する。また、Lord Henryの快樂主義的な影響力が自分に襲い掛かっていたことにも気づき、自らの良心を保ち、彼のことは二度と耳をかすまいと決意する。しかし第8章では、Sibylは毒を飲んで自殺してしまったことがLord Henryによって知らされる。

なぜ彼女はDorianとの婚約が破棄された直後に自殺してしまったのだろうか。SibylにとってDorianの存在がそれほど重要だったのであれば、もう一度Dorianを魅了する芝居をすればよかったはずである。しかし、彼女はDorianの愛が戻ってくるかもしれないという可能性を自ら捨ててしまったのだ。

ここで、Dorianとの関係の中でSibylにはどうすることもできない語用論的パラドックスが生じていたことに注目したい。そのパラドックスとは「自発的であれパラドックス」というものである。まず、Watzlawickの『変化の原理』からその具体例を引用する。

不眠症者は自身を典型的な「自発的に！」パラドックスに置いているのだ。即ち彼は意志の力で眠りという自然にそして自発的に起こるべき現象に達しようとしているのである。そして夜中じゅう起きていることになる訳だ。同様に抑うつ状態にある人が自分の気分を変えようとしてその感情に注意を集中して「抑うつから自分を抜け出させ」なければとする。この「ねばならぬ」とは、十分力を入れて起こそうとすれば、自発的に起こし得るものという意味である。(94-95)

これは、自然に起こるべき行動が意志や努力によって成し遂げられると考えることで、陥ってしまう

一種の悪循環のことである。普段我々は眠るための努力などせずに自然と眠くなり、勝手に寝てしまうものである。しかし、不眠症者は眠れない際に、寝ようと努力し、さらに眠れないことを意識する。そしてさらに、眠るための努力を試みる。こうして抜け出せない悪循環であるパラドックス的状况にはまってしまうのである。このことは、抑うつ状態にある人にも言える。

引用で言及されている不眠症者や抑うつ状態にある人と同じ状況に追い込まれてしまったのが Sibyl である。彼女は、Dorian と出会って恋に落ちるまで、舞台上のすべてを現実だと感じていた。それは芝居の稽古などによって得られたものではなく、彼女が自然とそう感じていたのである。そのために彼女の芝居は魅力的であり、偉大だったのである。Dorian が Sibyl の芝居に対し、“[Y]ou realized the dreams of great poets. . . (85)” と述べていることから、いかに彼女が舞台上に現実を見出し、彼女自身がその「現実」の一部となり得ていたかをうかがい知ることができる。しかし、王子様の登場によって魔法が解かれる童話のお姫様のように、Dorian との口づけによって目の覚めた彼女は舞台に現実を感じることができなくなり、その結果芝居も色あせてしまうのである。そして、芝居における芸術性を愛によって失ったなどというのは浅はかで愚かだと Dorian に突き放された Sibyl は、次のような発言をしている。

I am so sorry I didn't act well. I was thinking of you all the time. But I will try — indeed, I will try. It came so suddenly across me, my love for you. I think I should never have known it if you had not kissed me — if we had not kissed each other. . . . [C]an't you forgive me for to-night? I will work so hard, and try to improve. Don't cruel to me because I love you better than anything in the world. After all, it is only once that I have not pleased you. But you are quite right, Dorian. I should have shown myself more of an artist. It was foolish of me; and yet I couldn't help it. . . . (85-86)

Dorian の発言を受けて大いに反省している様子であるが、Sibyl は自分の芝居に対して “try” という語を用いている。それは彼女が「自発的」に演じることができないことを暗に示しているのではないだろうか。Watzlawick の言葉を借りれば、「意志の力」によって舞台上に現実を見るという「自発的に起こるべき現象」に再び達しようとしたのだ。しかし、引用の末尾で “I couldn't help it.” という発言をしていることから、Sibyl はそれが不可能だと察していたことがうかがえる。というのも Dorian と知り合い恋に落ちたことで、彼女は彼女が思う真実の愛を知ったのであり、愛の芝居が軽薄な真似事に成り下がってしまったためである。彼女にとっての真実の愛とはすなわち、女優という肩書きや Dorian との社会的な立場の違いにとらわれることなく、一人の女性として彼女の内側から自然と湧き上がる感情であろう。Sibyl が相手方の役者と創り上げていた愛という芸術は、芝居という状況によってもたらされた架空のものだったのだということを痛感するのである。そうして、Dorian との間に真実の愛を見出した彼女が舞台上で感じるものは、ただ、すべてがまがい物であるということだったのだ。しかし彼女は、以前の芝居を取り戻さなければ、Dorian の愛も帰ってこないことを悟っている。Dorian との愛の世界と舞台上の世界という、今や二つの「現実」を失った彼女にとっては人生そのものを失ったに等しかったのだ。さらに経済的な面でも彼女は、Dorian の妻として裕福になるという道だけでなく、女優として自ら稼いでいく道も失ってしまった。Dorian との関係がパラドキシカルになったことで、Sibyl の元に残ったものは何もなかったのである。これらの苦しみから逃れるために、彼女は自ら命を絶つという選択をするほかになかったのであろう。

4 Dorianが陥りかけたパラドックス

牙えをうしなったSibylの芝居に侮辱を受けたと感じるDorianは、一方的にSibylを責め立て、帰宅してからも自分の振る舞いを正当化する。しかし、彼自身もパラドックスに陥る可能性があったことについて考察を進めたい。

Dorianは女優としてのSibylしか知らず、その美貌と優れた芝居に惚れていた。彼女の演技力があれば、偉大な芸術家として有名になり、栄光を掴むことができると確信していた。つまり、Sibylという「女優」を愛していたのである。だからこそ、Sibylの落ちぶれた芝居の後に、彼女からの熱烈な愛の告白を聞いても、彼の彼女に対する心は冷め切ったままであった。

[Y]ou have killed my love. You used to stir my imagination. Now you don't even stir my curiosity. You simply produce no effect. I loved you . . . because you realized the dreams of great poets and gave shape and substance to the shadows of art. You have thrown it all away. You are shallow and stupid. My God! how mad I was to love you! What a fool I have been! You are nothing to me now. I will never see you again. I will never think of you. I will never mention your name. You don't know what you were to me, once. Why, once . . . Oh, I can't bear to think of it! I wish I had never laid eyes upon you! You have spoiled the romance of my life. How little you can know of love, if you say it mars your art! Without your art you are nothing. I would have made you famous, splendid, magnificent. The world would have worshipped you, and you would have borne my name. What are you now? A third-rate actress with a pretty face. (85)

これこそがSibylがパラドックスに陥った発言である。Dorianはいかに過去のSibylにあった芸術性が優れ、それが彼の心をとらえたかということ述べる一方で、現在のSibylには何の価値もないということを吐き捨てている。そして彼はSibylの呼びかけを無視し、舞台裏を去るのである。自宅で自らの冷淡な行為を振り返るも、彼は自分を正当化し続ける。しかし、その考えは肖像画の変容によって揺らぐのである。彼は肖像画に表れた残酷さが自身の精神的変化、つまりSibylへの残酷な仕打ちをした彼の精神を反映したととらえ、Sibylへの態度を反省するのだ。そのときの彼の心情は、語り手によって次のように語られている。

He would go back to Sibyl Vane, make her amends, marry her, try to love her again. Yes, it was his duty to do so. (89)

三流女優となったSibylを愛せないと吐き捨てたはずの彼だったが、もう一度彼女を愛することを心に決めるのである。Dorianは、肖像画の残忍さをもつ笑みからSibylに対して誠実に振る舞うべきであったというメッセージを受け取り、もう一度彼女を愛することを選ぼうとしたのだ。しかし、すでに述べてきたように、DorianはSibylの優れた芝居に惚れていたのであり、それを失った彼女に興味はない。この引用においてDorianも“try”という語を用いていることは注目に値する。果たして人を愛するということが、「意志の力」によって達成されるものであろうか。不眠症者が眠らなけ「ればならない」と考えて眠れなくなってしまうように、Dorianも愛さなけ「ればならない」と考えることで、かえってその愛は本来の愛から遠ざかるものとなるのではないだろうか。SibylのDorianへの愛は、そのような意志とは無縁のものとして湧き上がってきたものであったことは先述したとおり

である。したがって、Dorian自身もパラドックスに陥りかけていたということもできそうである。たとえば、Sibylが自殺せず、Dorianが再び婚約する機会を得たとしても、Sibylが以前のように立派な芝居を取り戻していなければ、彼の愛も取り戻されることはなかったであろう。そのためにやはり、Sibylという女優を愛していたDorianが彼女を心から愛することも二度とできないのである。

ここで、Lord Henryの興味深い発言を引用したい。

If you had married this girl you would have been wretched. Of course you would have treated her kindly. One can always be kind to people about whom one cares nothing. But she would have soon found out that you were absolutely indifferent to her. (97)

まるでLord Henryは、Dorianの愛さなけ「ればならぬ」という「意志」による結婚によってDorianが苦しむということや、彼が二度とSibylを愛することができないことが分かっているかのような口ぶりである。Lord Henryも予測しているように、偉大な演技力を失ったSibylをDorianが再び愛することはない。それでも彼がSibylとの結婚を果たすことができたとすれば、彼は愛していない、そして愛することのできなくなってしまう女性を愛さ「ねばならぬ」というパラドキシカルな状況に自らを追いやっていただろう。

Sibylはすぐに自殺してしまうため、Sibylが生きていた場合、彼らの運命がどうなっていたかを知ることにはできない。しかし、Sibylの死は彼女とDorianの各々が抱える可能性のあった悪循環を防いだのだということが読みとれるのではないだろうか。

おわりに

本論では主にSibylを中心に取り上げたが、本作の登場人物間のコミュニケーションを考察していくと、さまざまな場面で語用論的パラドックスが見てとれる。BatesonやWatzlawickは錯綜した人間コミュニケーションにはパラドキシカルな状況が多く存在していると述べているが、このことは文学作品である本作においても言える。また、本来、語用論的パラドックスに限らず、コミュニケーションそのものに拘束性がある。そこで、主人公であるDorian自身も作中全体を通してパラドキシカルな状況にあることや、コミュニケーションによって登場人物の行動にどのような影響が見られるかについては、稿を改めて論じたい。

先にも述べたように、Sibylの登場はこの物語において非常に重要な役割を担っている。そして、物語の終盤において彼女の弟であるJamesの存在がDorianの精神を追い込むことになるため、彼の存在も忘れることはできない。Vane姉弟の存在は、Dorianの精神的変化から死に至るまでの要所を飾っているのだ。さらに第19章では、Hetty Mertonという少女と恋に落ちたDorianがSibylのことを思い出し、まるでSibylに対する罪滅ぼしであるかのようにHettyを手放したという描写がある。というのも、DorianはHettyと駆け落ちをする約束までしていたのだが、彼女をSibylと同じ目に遭わせてしまわぬよう、当日になってその約束を無断で破ったのである。Dorianのこの行動が真に、Hettyを想った行動であるのかどうかをここで論じることは避けるが、少なくともDorianはそれが彼女のためだと主張している。さらにDorianは、“She [Hetty] was quite beautiful, and wonderfully like Sibyl Vane” (201) と述べており、明らかにSibylの投影としてHettyを眺めている。しかし、Dorianと恋に落ちたSibylがパラドックスに陥ったことですべてを失った一方で、Hettyがパラドックスに苦しむことはないと言える。というのも、農場の娘であるHettyには、Sibylにとっての舞台のような芸術として表現すべき空間を持ってはいなかったからである。つまり、Hettyは始めから生身の、ありのままの女性としてDorianに対することができたと言える。それに対して、Sibylは

女性としての彼女自身ではなく、あくまで才能ある、Shakespeareの悲劇のヒロイン役者として愛されていたからこそパラドックスに陥ったのだ。しかし、読者にとってのHettyは、Sibylのように実体を伴った存在として作品の中でとらえることは難しい。というのも、Hetty自身が作中でその姿を読者の前に見せることはなく、Dorianによって言及されるのみだからである。さらにここで注目すべきは、Dorianの視線によって、Hettyが生身の人間ではなく、一つの芸術作品のメタファーとして描かれていることである。

As I rode past the farm this morning, I saw her white face at the window, like
a spray of jasmine. (201)

この引用は、Dorianが最後にHettyを見たときのことを述べている部分だが、彼の目にHettyは、窓枠を額縁とする絵画のようにとらえられている。ここに、HettyとSibylの人生の倒錯を見ることができる。すなわち、人気女優であったSibylがDorianとの関係によってその芸術性ととも命まで失った一方で、HettyはDorianの視線によって永遠を手に入れたかのような絵画と化している。言い換えると、SibylがDorianの愛を得ると同時にその芸術性を失った一方で、HettyはDorianの愛を失うと同時に芸術性が付与されたのである。すなわちHettyを絵画化することで、Sibylによって破られたDorianの芸術への憧憬は達成されたと言えるだろう。Hettyへ最後に芸術性を付与することで、DorianはSibylが失った芸術性を間接的に復活させようと試みたと言えるのではないだろうか。

引用文献

- Wilde, Oscar. *The Picture of Dorian Gray*. Ed. Robert Mighall. London: Penguin, 2008.
- 佐々井啓. 『ヴィクトリアン・ダンディー・オスカー・ワイルドの服飾観と「新しい女」—』 東京: 勁草書房, 2015.
- 角田信恵. 『オスカー・ワイルドにおける倒錯と逆説』 東京: 彩流社, 2013.
- ベイトソン, グレゴリー. 『精神の生態学』 佐藤良明訳. 東京: 新思索社, 2000.
- ワツラヴィック, ポール, ジャネット・ベヴン・バヴェラス, ドン・D・ジャクソン 『人間コミュニケーションの語用論—相互作用パターン, 病理とパラドックスの研究—』 山本和郎, 尾川丈一訳, 東京: 二瓶社, 1998.
- ワツラヴィック, ポール. 『変化の言語—治療コミュニケーションの原理—』 築島謙三訳, 東京: 法政大学出版局, 1989.
- ワツラヴィック, P., J・ウィークランド, R・フィッシュ. 『変化の原理—問題の形成と解決—』 長谷川啓三訳. 東京: 法政大学出版局, 1992.

参考文献

- Watzlawick, Paul, Janet Beavin Bavelas, and Don D. Jackson. *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes*. New York: Norton, 2011.
- Stevenson, Robert Louis. *Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde and Other Tales*. England: Oxford University, 2008.
- Poe, Edgar Allan. *The Fall of the House of Usher and Other Writings: Poems, Tales, Essays, and Reviews*. London: Penguin, 2003.
- コリー, ロザリー・L. 『パラドクシア・エピデミニカルネサンスにおけるパラドックスの伝統—』 高山宏訳. 東京: 白水社, 2011.
- 斎藤純男. 『言語学入門』 東京: 三省堂, 2010.
- 中村秀吉. 『パラドックス』 東京: 中央公論社, 1972.
- 富士川義之, 玉井暉, 河内恵子編. 『オスカー・ワイルドの世界』 東京: 開文社出版, 2013.
- ベイトソン, グレゴリー, ジャーゲン・ロイシュ. 『精神とコミュニケーション』 佐藤悦子, ロバート・ボスバー

グ訳. 東京: 新思索社, 1995.

三浦俊彦. 『ラッセルのパラドクス—世界を読み換える哲学—』東京: 岩波書店, 2005.

宮崎かすみ. 『オスカー・ワイルド—「犯罪者」にして芸術家—』東京: 中央公論新社, 2013.

山田勝. 『世紀末とダンディズム—オスカー・ワイルド研究—』大阪: 創元社, 1981.